

平成 25 年度 第 2 回狩猟鳥獣のモニタリングのあり方検討会（鳥類）  
議事概要

日時：平成 25 年 11 月 8 日（金）14:00-16:00

場所：（一財）自然環境研究センター 7 階会議室

議事（1）. ウズラの繁殖期におけるモニタリング手法（マニュアル）の修正案

マニュアルの修正案について

➤ 前検討会での指摘の修正について

- ・ 再生音源はオス・メスキックスの鳴き声と変更することに関して、13 ページ部分の記述が修正されていない。ルートセンサスの調査票も掲載した方がよい。（川路）
- ・ プレイバック法やルートセンサス法であるとかいろんな方法論手法を示して、その中で自治体が一番やりやすい方法を選んで実施していただくようなマニュアルにした方がよい。EU の文献にある農家の方に協力していただく調査方法も、事務局側が勝手に判断してマニュアルから外さない方がよいのではないか。（川路）
- ・ 資料 1、5 ページの基礎調査の図の分布がわからない。色を使うなど分かり易くしてもらいたい。7 ページの図の下の説明では 2012 年となっているが 2013 年の情報も入っているので修正すべきである。また、文中では説明しているが、色分けの凡例も図の下に記述しておくべきである。（尾崎）
- ・ 8 ページの下の方にオスウズラという記述があるが、「オスウズラ」という種があるものとの誤解を招きかねないので、オスのウズラと記述した方がよい。（尾崎）
- ・ 9 ページの 3 行目の修正（音声を再生する距離設定）された部分について、懸念したのは、鳥の声が調査員に届く距離と再生音声が鳥に届く距離を考慮して考える必要があることを伝えたかった。（尾崎）
- ・ 調査目的に応じた距離設定の考え方も加味すべきである。この調査がモニタリングであるならば、最初に設定した場所や距離設定は変えるべきではない。その場合、距離決定をそれぞれに任せることも一つの方法であるが、統一的なマニュアルであれば、こちらから距離設定をしてしまうのも一つの方法とも思っている。（尾崎）
- ・ ウズラを確認した場合に GPS に記録する位置は、実際のウズラの生息（鳴いた）位置ではなく、それを確認した調査ルート上となる。そのため、実際にウズラが鳴いた位置が、GPS に記録した位置から見てどの方向、どの程度の距離だったのかを調査票に書き込むようにすべきである。（尾崎）
- ・ 9 ページの真ん中の下の「誘因効果」の表記は「誘引効果」の間違いなのではないか。（川路）

➤ マニュアルの活用方法について

- 1 ページ目に北海道で活用することを想定しているとあるが、北海道以外での実施も計画されており、その場合は「条件に適さない部分があるので注意してください」となっている。どう注意して活用していくのかがわかりにくいのでは。(橘)
- 北海道を想定して「他のところでは注意して活用ください」と記述してしまうと、北海道以外の自治体はやらなくてもよいと受け取ってしまう可能性がある。実際の状況は、本文に記述されているので、ここまで気を遣わなくてもよいのではないか。(川路)  
北海道での調査時期や生息適地が絞り込んで書かれているので記述した部分もある。書き方を変えて、「北海道中心に書かれているけれども、広く応用してお使い下さい」という記述等に修正する。(事務局：安齊)  
使用上の注意の2 ポツ部分について、「近年、」以下の部分を削除し「北海道で実施した調査結果を元に作成いたしました」とのみ記述するだけでよいのではないか。(環境省：湯浅)
- 北海道でのみ実施されて、それ以外の地域で調査が行われなかった場合、もし本州のどこかでウズラの回復しているところがあっても、そのモニタリング自体が実施されないこととなる。それを防ぐ意味でも無駄になるかも知れないが全国規模での実施を視野に入れてもらいたい。(川路)
- マニュアルの配布スケジュールはどのように考えられているのか。繁殖期となる6月に間に合わせるのであれば急ぐ必要があるだろう。(川路)  
このマニュアルは、非繁殖期の調査手法もセットにしてまとめることを想定している。ただ、このマニュアルを具体的にどう活用するかは、現在検討中。繁殖期のものだけであれば、ご意見の通り、もう少し詰めた上で、早めに幅広く情報を提供するという事は可能だと思う。(環境省：松尾)
- 固定調査地を作ったモニタリングを考える上でも、生息情報そのものが不足している状況なので、生息分布を把握することに重点を置いたマニュアルになると考えている。(環境省：松尾)  
そのような状況であれば、プレイバックの音声再生の距離設定も長めに設定して良いのではないか。(尾崎)
- プレイバックの調査票の備考に記述する内容について例示があった方がよい。例えば目視したとか、ヒナを見たとか、個体の確認の確実性や繁殖の情報を得ることでヒナが出た時期がいつ頃であるといったことの蓄積が可能となるだろう。(尾崎)
- 生息分布を確認することに重点を置いた調査をやる場合、調査を実施したが生息は確認できなかったというデータが重要となるのではないか。(橘)  
調査を実施したが確認できなかったという記録も確実に報告してもらえるような記述を含めたい。(環境省：堀内)

## 議事(2). ウズラ・ヤマシギのモニタリングに係る試行調査(非繁殖期)手法について

### ウズラについて

- これまでの試行調査で猟犬がポイントした箇所に鳥がいなかった割合はどれくらいあったのか。また、鳥がないのにポイントした原因は何なのか。ポイント地点にウズラ以外の鳥がいたようなことはなかったのか。(川路)

ポイント箇所に鳥がいなかったことはほとんどなかった。いなかった場合は、羽や死体の見つかることがあった。ウズラ以外の鳥としては、タマシギやヒクイナ、タシギ、キジなどが出たことがある。猟犬は鳥の種類を選んでポイントする訳ではない。(事務局：中山)
- 非繁殖期の調査マニュアルを作る場合は、風の強さや風向きなどの条件が一番重要になるとのでは思う。(川路)

協力いただいた狩猟者曰く、猟犬をかける場合は風下から行うとのこと。(事務局：中山)
- 今年度の調査は、何カ所というか、何ルートくらい実施される予定なのか。(橘)

九州で4県、関東で1県、1県2ルートぐらいの実施を見込んでいる。(事務局：中山)
- この実施計画は、作業量的なこと決めたものなのか。生息環境自体が少なくないということを決めたものなのか。(橘)

ウズラの生息環境も限られていることと、鳥用の猟犬を持っている方も限られていることが理由。今回もブリーダーの方を経由して猟犬を持っている狩猟者を紹介いただいた。獣類用の猟犬では鳥の追い出しは無理なので、鳥用にトレーニングした猟犬で実施することが必要。(事務局：中山)
- 試行調査の結果部分に示されている「踏査距離」とは人間が踏査した距離なのか。それとも猟犬が踏査した距離なのか。(川路)

猟犬に付いていった人の踏査距離となっている。(事務局：中山)
- 過去に実施した阿蘇における調査では、宮崎での調査距離と比較して非常に長い距離を対象にしているのは何か理由があったのか。(橘)

この年の阿蘇の調査では、ウズラが全く見つからず、先へ先へ調査範囲を進めて行ったためである。なお、狩猟者からの聞き取りによれば九州地方だと例年10月20日頃渡ってくるとのこと。ただし、気象条件や大陸の状況によって、個体数に変動があるようだ。(事務局：中山)
- 繁殖期のマニュアルでも思いましたが、ウズラの生息する箇所は環境的に限られているようなので、生息する環境因子を取り出して、GISで地図作り、生息候補地を図示できれば、調査を実施する場合に行政機関なり、猟友会なりが調査を実施しやすいのではないだろうか。(川路)

- ・ 調査を実施することになった際、ウズラが生息しそうなメッシュ数が少なければ予算措置を考える場合の判断材料になるのではないかと。各県ごとに生息候補地を示せば各自治体もやりやすいと思われる。(川路)
- ・ 調査実施距離については、この後いろいろ試した上で適正な距離の目安を示すべきなのでは。もし距離を長くすることが可能で、調査回数を増やせるのならよりよいだろう。(橘)
- ・ 茨城県でのヤマシギの生息及び捕獲データの情報提供者は、昨冬、同県内でウズラも捕獲しているので、ウズラの情報もヒアリングしたらよいだろう。(尾崎)  
 今度ウズラについてもヒアリングしたいと思う。(事務局：安齊)

#### ヤマシギについて

- ・ 11月に調査を実施することだが、この時期は越冬個体といえるのだろうか。通過個体と言う可能性はないのか。(川路)  
 生息地への執着が強いヤマシギは、狩猟が始まって捕獲されてしまうと、捕獲実績のある位置でも生息確認が難しい可能性があるとして以前の検討会でご意見をいただいた。このため、今年度は同一地点で狩猟解禁日前後の2回の調査を予定。2回の比較で何か分かればと思っている。(事務局：中島)  
 ヤマシギの標識調査において、北海道の道東で10月中旬に放鳥された個体が、千葉県の銚子近辺で11月中旬に回収されたという例がある。(事務局：安齊)
- ・ アマミヤマシギがいる地域ではアマミヤマシギとヤマシギの区別は結構難しいであろう。よい写真が撮影できれば区別可能だが。同所的に生息する場所での調査は要注意である。(尾崎)
- ・ 生息数について狩猟前と狩猟後で何か傾向出ればよいが、必ずしも出ない場合も考えられる。その場合、数の増減の要因が何によるものなのかといった懸念が将来出てくるだろう。ただ、越冬期のヤマシギの調査手法に関しては他に方法が思いつかないのが現状でもある。(尾崎)

### 議事(3). ヤマドリのモニタリングに係る調査状況について

- ・ 初猟日の出合数調査の実施対象者はキジ・ヤマドリを獲る人のみが対象なのか。それともガンカモや、獣も含めてとにかく猟に出た人を対象としているのか。(尾崎)  
人選は基本的に県の担当者が猟友会等にお任せしているようだ。(事務局：中島)
- ・ そのような調査方法であればベースがだいぶ違う可能性がありそうである。(尾崎)
- ・ 出合数調査自体、キジ、ヤマドリを主に狩猟対象としている人を対象としていると思っていた。自治体担当者は狩猟者個人が何を狩猟しているかまでは把握できないだろう。(川路)  
猟友会の全会員に調査票を出しているような自治体もあり、特に調査対象者を選んでいない場合もある。また、ヤマドリはシカ猟を実施する環境にも生息するので、シカ猟中に見られたものを報告してくれることはあるかもしれないが、ヤマドリを狙って出猟している場合と比較すると出合数が過少となる可能性があると思われる。(事務局：中島)
- ・ 出合数調査もヤマドリを狙って鳥猟用の猟犬を連れて実施する場合と犬無しでシカを撃つついでに実施する場合では明らかに調査結果の精度にばらつきが出てしまうだろう。(川路)
- ・ 出合数調査を今後どうすべきか。理想的に実施している自治体を参考にしてその手法で統一した方がよいのか。全体的に無理なく実施できる手法で落としどころを見つけた方がよいのか。もしくは新たな手法を示して実施してもらえるようにすべきなのか。私自身は新たな手法とすることを進めたいが、強制は難しいのだろう。(川路)
- ・ 西日本や九州でヤマドリ猟を実施している狩猟者は非常に少ないので出合数調査もキジが中心になっているのではないかと。もしかしたらヤマドリという種に特定してアンケートを実施して、もう一つ絞り込んだ方がいいのかもしれない。(川路)
- ・ ヤマドリに関する情報として、ヤマドリを捕れる人がどれぐらいいるのか、どのような狩猟方法を行っているのか。常に通っている主要な猟場でもヤマドリが少なくなったり、いなくなってしまうたりした場合は、場所を変えるのかといったことも聞いてみたい。(川路)
- ・ 今回のアンケート自体は、自治体がどのように調査を実施しているのかとすることを把握する意味では意義があった。別途、調査員自体のアンケートも必要ではないか。(川路)
- ・ これまでに実施されてきた出合数調査について、別途ヒアリングなどで良い点と問題点を具体的にまとめるべきなのではないか。調査による精度のばらつきが出るのは当たり前であり、良い形で実施されているようなところをモデルとして何かしらの評価をすべきかとも思う。本調査自体、ある程度形骸化しており、課題点をクリアできるような方法を考えてやるとよいのではないかと。(橋)

今回のアンケートによって、本調査は非常に長期間に渡って実施されているものの、調査自体はしっかりと引き継がれて実施されているという点がはっきりしました。(事務局：中島)

- ・ 追加情報としてヤマドリを確認した場所の市町村名やメッシュ番号のデータ収集を 16 都道府県が実施している点は驚いたし、貴重で良いデータなのではないか。(川路)
- ・ 出合数調査は全国的な傾向として見るものとして、ヤマドリの生息数については狩猟期間を通して捕獲数のデータとなるのでないか。初猟日の調査で出合がなく、他の日や場所に出合えたデータがある場合そちらの方が重要だろう。(川路)
- ・ 初猟日の出合数調査で一番貴重なのはメスの生息数のデータである。狩猟の捕獲データでは狩猟禁止となっているメスの数が出ないため。この点を重視した調査にすべきである。実際に出合数のデータが多いところの調査手法の実態調査が必要かもしれない。(川路)